# 中国における「家族の個人化」の形

## ―《谁在你家　中国〝个体家庭〟的选择》―

彭　永成

## 一　はじめに

一九五〇年代初頭の中国で行われた社会主義改革の中で、宗族は極めて重要な改革すべき対象とされた。ただしそれは中国における「個人主義」の台頭を意味するわけではない。重要視されたのは「私益を捨てて公益を守る」（舍小家为大家）という集団主義の価値観であった。

ただし、このような価値観が成立する土台を崩していくような動きが一九七〇年代後半から見られた。一九七〇年代末期農村から広まった経済体制改革から、一九九二年に経済の活性化を図るために遂行した市場経済改革経済を経て、これまで個人の努力や貢献の大きさに関係なく、全員同じ水準に給与するという集団主義の基礎が崩れ始めた。個人に経済面における自由とリスクを同時に与えることによって、個人は集団から解放されるようになった。

このような中国社会の個人化についての研究も盛んに行われてきた。閻雲翔の『中国社会の個人化』（The Individualization of Chinese Society, 二〇〇九）（一）が代表的な例として挙げられる閻が一九九〇年代に行ったフィールドワークの調査データを基に、中国における農村（二）社会の個人化を家庭形態、伝統儀礼、青年文化などの側面から論じている。

それでは、インターネットが普及した二〇〇〇年代

に、農村ではなく経済の資本主義化がさらに進んでいる都市社会において、家庭形態の個人化はどこまで進んでいて、どのような特徴を表したのか。また、核家族が社会主流の家族形態であるとも指摘される一方、中国の都市では、拡大家族も多く存在し、世代間のトラブルもよくドラマやバラエティ番組の素材になっている。このような一見矛盾しているようにみえる社会環境を背景に、中国の都市社会における家族形態の変化は果たして「個人化」の理論に収めることはできるのか。

このような疑問について答えを出したのが沈奕斐（二〇一九）『あなたの家には誰がいますか――中国の個人家族の選択』（谁在你家　中国〝个体家庭〟的选择）である。この書は、沈奕斐氏が二〇一〇年に中国復旦大学に提出した博士論文を基に出版された『個人家族 iFamily』（《个体家庭 iFamily》）を加筆した二〇一九年の新版である。

本稿では、沈書の内容を要約した上で、その学術価値について評価し、残した課題も提示したい。

## 二、　本書の要約

### ・序章：個人化の中にある中国の都市家庭（个体化进程中的中国城市家庭）

中国の都市における家族の変遷に関する研究は、主に家族機能、家族構造とのその内部関係性の変化に注目している[二]。これまでの研究では、中国における家族の変遷について、以下三つの特徴をまとめた。（一）家族構造には家族規模の縮小、核家族化。（二）家族機能は経済的な協働から親密関係の構築への転換。（三）家族内部の関係性における縦軸の親子関係から横軸の夫婦関係へと移行とそれにともなう女性の権力の上昇。

以上三つの結論は様々な調査統計データから検証できるが、果たして社会の個人化が進む中、中国の都市における家族の変化はそのような方向で進んでいるのか。このような結論を踏まえた上で、本書の主たる問

題の関心は、現代社会、とりわけ都市社会において、個人と個人、個人と家族の関係性及び家族内の権力構造はどのようになっているのかを検証することにある。

また、同じく家族の個人化について論じているとは言え、中国におけるこの現象は、「家族の個人化」を論じる際に参考にされる U. ベックの捉えるドイツ社会やアメリカ社会とは異なった姿を持って進んでおり、伝統的共同体との関係を踏まえなくてはならない実態があると考えられる。そのため、本書はその中国ならではの「家族の個人化」の特色にも注目している。

**・第一章　in-depth interview の混合モデル：ケースメゾットピラミッド型**

**（深度访谈的混合模型：个案金字塔阵）**

本章では、本書が採用するインタービュー調査の方法、研究対象の選択基準、そしてインタービュー調査の倫理とその制限について述べている。研究対象の選択基準は以下になる。

（一）夫婦はともに一九六六年以降生まれること（調査当時は四十代以下）

（二）夫婦の中少なくとも一人は大学あるいはそれ以上の学歴を持つこと

（三）上海に戸籍があること

（四）親が地元を離れて、上海にいる子世代の家の中に住み込むこと

以上四つの基準を踏まえて、著者は上海にいる46戸ホワイトカラーファミリーを研究対象とし、インタビュー調査を行った。この調査において、「家族とは何か」を最も中心的な質問として取り上げている。しかし、研究対象からえられた回答数が充実していくうちに、著者は社会学の「家族」の定義に対する疑問がより深まった。今日の都市において、家の構造は流動的であり、不確実性に満ちている。同じ家に所属している家族メンバーも、それぞれ異なる家族意識を持っている。このように異なる家への理解をスタートとし、家族意識を支えるメカニズムに焦点を当てる。それぞれ異な

る家族意識を持つ人々は各自家の中でどのように位置付けられているのか、なぜ彼らはそのような位置に立って、そのような意識を持っているのか？こうした質問を答えることによって、本書は現代の都市における家族内部の権利構造、そして家族間の新しい関係性について描き出すことを目的とする。

## ・第二章：家族構造の理想像：「二つのドア、一杯のスープ」

### （理想的家庭結构：「两扇门、一碗汤」）

中国の都市社会における家族構造の理想像について語る時には、「二つのドア、一杯のスープ」という言葉は最も多く見られる。社会の個人化の度が深まっていくうちに、人々はより個人のプライバシーを大切するようになってきている。親子両世代とも、世代間の絆の重要性を充分に認識した上で、二世代同居のトラブルに対する恐れや個人のプライバシーを保つために、“二つのドア”が今時の理想的家族像について語る時に前に置かれる。それでは、なぜ“二つのドア”を述べた後に“一杯のスープ”について言及するのも不可欠なのか。個人主義の価値観が明らかに世の中に流行っているにもかかわらず、人々は伝統的な家族主義文化を想起し、世代間のコミュニケーションを重視しているのか。

共働き家族が一般的な中国において、女性には仕事と家事両方の重任が課せることになる。これまでの先行研究によると、女性の負担を軽減するための方法として、男性が家事に参加すること、最新の家電製品を購入し、家事時間の減少を減少すること、家事労働の社会化、すなわち育児や看護施設に頼むことが上がられてきた。

ただし、そのような共働き家族の中、子供が生まれると、以上の方法では解決できない四種の育児に関するプレシャーが若者夫婦に襲う。（一）いかに正確に、よりよい子育てをするのか。（二）家政婦を雇う経済力を持たない、あるいはそもそも家政婦に信用できない。

（三）女性の産休と育休が保証できなくて、保証されるとしてもその時間が育児にとっては短いのである。

（四）社会の激しい競争を背景に、男女問わずに育休を取ることは職場の居場所を失うことにつながるおそれがある。このようなプレシャーを解消するにあたって、両親は最も理想的なお手伝いさんとして、家族内部における重要性が浮上する。すなわち、共働き家族において、親が第二の「妻」になり、家事と育児の役割を果たすのが最も理想的な家族構造として見られる。

それでは、なぜ親は二人目の妻になるのか。その理由は以下のようにまとめられる。まず、家父長制の崩壊によって、家の中において、年齢による優遇はなくなり、両親が子どもの尊敬を得るために他の手法を取らなければならない。また、中国社会における老人の福祉政策や施設は不完備であるため、両親の老後には子どもの看護が必要としている。さらに、集団主義の価値観の残骸は四十、五十年代生まれの親たちに根強く残っていって、子どものために個人の生活を犠牲するのは当たり前として考えられている。

## ・第三章　多元的かつ流動的な家族構造（多元而流动的家户结构）

住宅は中国の家族形態に影響を与える最も重要な要因であることはこれまで様々な先行研究が指摘してきた。本章は、それを踏まえた上で、社会の個人化を背景に、家族構造の規範の変化についてまとめることを試みている。インタービュー調査を通じて分かった結論は以下になる。

まず、これまで中国社会では主流だった夫方居住婚がなくなりつつあることが分かった。二世代同居にしても、夫ではなく、子世代に従って住むことになっている。また、住宅を背負うのは男性であっても、それは家の内部における男女の地位に影響が少なく、そのため女性、特に嫁の地位が降下することもほとんどなくなっている。

ただし、夫方居住婚の消失は核家族化が進んだこと

を意味するわけではない。各家は各自、自分自身の経済力そして人力資源の角度から、自分たちとって最も適切な家構造を選ぶ。そのため、中国の都市社会における家族構造の規範は多元的、且つ流動的であるとも言える。つまり、社会が個人化していく中、伝統と現代性が混じり合って、どっちを取るかは個人の選択の自由ということである。拡大家族の形を取ることイコール伝統を重視、核家族の形を取るのは現代性に従うことでは必ずしもない。

**・第四章　個人によるファミリーアイデンティティー**

**（从个体出发的家庭认同）**

個人化する家族の特徴の一つとして、各個人が自分自身を家の中心として、他の家族メンバーについて語ることが挙げられる。ここでインタービュー調査を通して得た結果としては、男性が家族として語るメンバーはいつも女性より多いことがわかった。女性の多くは自分の両親、配偶者、子供を家族メンバーとしての認識を持っているが、男性はさらに自分の兄弟を含む。また、親世代によるファミリーアイデンティティーの特徴は、全ての親族が含まれることが挙げられる。ただし、自分名義（女性の場合は夫名義）の住宅を持たないと、自分だけの家はなくなっていると考える傾向がある。今回の調査対象の選択基準の一つとして、親が子どもの家に住み込むことがあったが、そのような親たちのほとんどは、自分が子どもの家の一員としての考えがなく、あくまでも手伝い人であるというような自己認識にとどまる。

**・第五章　家と家の関係：融合と対立**

**（家与家的关系：融合与对立）**

大家族の中に、高収入、高学歴、社会地位の高いといったリーダー的な人物が存在すると、その周辺にいる親戚の集まりが強くなる。ただし、その集まりはいつも片側の親縁に限る。義理の親戚との対立は今の時代でも依然として存在する。

・第六章　血は水より濃い：既婚の一人っ子家庭を例に

（血浓于水：以已婚独生子女家庭为例）

多くの一人っ子は高校、大学時代以外は、いつも親と一緒に暮らしている。そのため、彼らにとって、結婚した後、親世代を自分の家族メンバーとして暮らすのはごく当たり前のことだと考えられる。配偶者と自分の親の間にトラブルが起きてしまった時以外、彼らはこのような緊密の世代間の付き合いを問題視することはなかった。

また、中国において、一人っ子たちの個人化には二つ矛盾する特徴がみられる。彼らにとって、個人の人生は一番重要なこととして考えている。例えば、育児に関しては、彼らは自分の人生の一環として考えることが多く、必要性はともかく、これは家族メンバーとして責任とか、親の老後を考えるためとか、このような発想は少ないのである。ただし、一方で、彼らは自分の両親をより重視し、親は結婚しても依然自分の家の一員として位置付ける。

・第七章　水は血液に溶けにくい：義理両親への親孝行のジレンマ

（水难溶于血：对配偶父母的孝道困境）

伝統的な親孝行の規範としては、以下三カ条が挙げられる。それは、まず、夫婦は一体として夫の両親に親孝行をすべきのである。また、男性は自分の両親に親孝行をする責任があるが、女性にはない。そして、親孝行は一種の義務であり、親の品性、経歴には関係がない。しかし社会の激変に伴い、現在の都市社会における家族の親孝行モデルも変わってきた。今では、夫婦は各自自分の両親に親孝行をすべきとされている。また、女性も夫の家庭に従属しなくて、男性と同じく、自分の両親に親孝行をする責任がある。そして、親孝行は一種のディスコースになり、両親、義理の両親への親孝行は、夫婦の関係及び高齢者の品性、経歴に直

接に関連している。

## 第八章　ポスト家父長制時代：性別と世代のクロス視点から見る個人家族

### （后父权制时代：性别与代际交叉视角下的个体家庭）

これまで中国の家父長制に関する先行研究では、家父長居住、家系継承と家内部の権力構造の三つの側面から論じてきた。家父長制が崩壊しつつある現在において、その三つの側面はそれぞれどのような変化が見られるだろうか。

まず、家内部におけるものごとの決定権と役割分担からみると、（上海の家の）家事労働における男女の平等が実現できたというのは早計である。特に今の若者世代では、社会の激しい競争の中、「男は仕事、女は家庭」という近代家族のような家族構造に戻りつつある。ただし、その中では、女性が全ての家事労働を担うのではなく、男女ともに家事分担のバランスを探していることも新しい特徴として挙げられる。

そして、一人っ子政策によって家父長制度の合理性がなくなりつつある中、子世代夫婦は家内部の権力構造において、親世代を上回ることが見られた。ただし、夫婦の間では依然として夫が主導権を握ることが多く、男尊女卑という儒教の伝統に質的な変化は起こらなかった。また、父の権力が減少したにもかかわらず、男性が握る権力には質的な変化はないとも言える。一家のうち、嫁が握る権力は上昇傾向にあるが、女性は以前より主導権を握っているとは言えない。あくまでも今の嫁が持つ権力は姑から譲ってもらったものである。

では、なぜ親世代が握る権力が徐々に失われていくのか。テクノロジーの発展による社会の激変を背景に、若者は高齢者より新しい情勢に適応することができる。そのため、親世代より、子世代が教育者の位置に立つことができる。このことは昔ながらの親子関係に深刻な変化をもたらした。中国社会は一九八〇年代以前、閉鎖的な状態にあり、その後世界への開放によって極端的な内部と外部の格差を経験した。年配者であるだ

けで尊敬される時代が終わってしまい、年配者たちはあっという間に「時代遅れ」という立場に落ちてしまった。そのため、中国における親子関係の変化は他の国より最も急激であると言えよう。

ただし、ここで親世代が絶対的な経済的優位性を占める家の中では、上記のような変化は見られなかった。

## 第九章　結論：個人家族の時代

### （結論：个体家庭的时代）

これまでのインタービュー調査で分かった中国の都市社会（上海）における家族の個人化の特徴についてまとめると、以下のことが言えよう。

（一）個人が家の中心になり、家族によって個人の生き方が決められることはなくなりつつある。

（二）世代間の関係性はまだ緊密とも言えるが、親密関係を保つ世代の範囲は縮小しつつある。

（三）夫婦両側の親族は同じ地位にいるが、義理の親族の間には依然として対立関係が成立する。

（四）家族構造は随時変動可能であり、その不確定性が高い。

また、家族機能については、経済的な協同と親密関係の構築の両方ともが重要な機能として見られる。

家内部の関係性では、主導する関係性が縦軸の親子関係から横軸の夫婦関係への移行ではなく、縦軸の親子関係が逆転し、子ども世代が家内部の権力中心になりつつある。夫婦の間においては、女性が握る権力が上昇しているとしても、それは男女が平等な立ち位置にいることを意味するのではない。

最後に、中国ならではの「家族の個人化」について、以下の特徴が挙げられよう。中国において、第一の現代性と第二の現代性は同時発生し、中国社会の個人化は伝統と現代性の駆け引きになっている。伝統は社会において、その支配的な力を失っているが、また一種の資源と規範意識として人々に影響を与えている。また、現代性の進展（経済制度の改革など）によって、個人は集団、家族から脱け出していくが、欧米型の個

人主義意識はまだ成熟してないため、リスクを直面する時個人はすぐ集団や家族に助けを求めるようになる。本書で見た上海の「個人家族」の形から明らかになっているように、一人っ子政策によって伝統としての家父長制はその合理性を失いつつあるが、家事や育児に困難がある時にはやはり両親に助けてもらうしかないという考えが普通である。これはつまり、今時の中国において、「個人化」の特徴の一つは、個人の選択そのものの形式が「伝統的」あるいは「現代的」としての意味合いは薄くて、あくまでも個人の自己実現のツールに過ぎなかったとも言えよう。

## 三、　本書の意義とこれからの課題

家族社会学研究の領域において、家族構造に関しての専門用語、例えば異なる家族の形態については、「核家族」「拡大家族」などの用語が挙げられよう。ただし、激変を経験している中国の都市における家族は、既成用語では定義できない形態が存在している。それは、本書が焦点を当てた社会の個人化を経験している家族である。要約の部分では触れなかったが、本書はこのような多元的且つ流動的な家族構造を「個人家族」（个体家庭／iFamily）と名つけて、そこから中国式の「個人化」の特徴を読み取ることを試みた。ここでまとめた上海における「個人家族」という家族形態の特徴は、これまで世界中で論じられてきた「家族の個人化」の理論との接点を提示しながら、中国ならではの「家族の個人化」の要素も明らかにした。つまり、本書によって、西欧やアメリカに適用した「個人化」の理論の枠組みに、中国の空白も埋めるようになり、同じく東アジアにおいて、日本とは異なる家族の個人化の形も解明できたのである。

また、都市社会を中心に行う家族社会学研究の領域に、これまでの研究は先行研究でまとめた家族機能、家族構造とのその内部関係性の変化についての結論に批判するものはなかった。本書は、そういった結論に

従わず、上海地域にいる研究対象を絞ることによって、「個人家族」が家族機能、家族構造とのその内部関係性などの側面に呈示した特徴を描き出した。

以上で述べた本書の学術意義を踏まえた上で、これからはあえて本書に対して批判的な立場を取り、本書の延長線上にある二つの課題を提示しておきたい。まずは、本書の中では、今回研究対象として取り上げた家族を「中産階層」(四)として分類したが、実際に各対象家族の年収はかなりの格差が見られるため、本書で得られた結論はどこまで一般的な上海の「中産階層」家族の特徴として読み替えるのか、という疑いが生じるかもしれない。また、本書では、家族内部の関係性について解明するため、特別に孫世代が生まれた後という時期にいる家族を対象としている。ただし、本書の中でも夫側の親族と妻側の親族との付き合いについて論じていた。両側の親族が同じ家族になってから、家族内部の関係性、その権力構造はいかなるものなのか、またそれはどのように変化していくのか。これらの疑問についてより明確な答えを出すためには、やはり男女の結婚、あるいは結婚式及びその準備段階から、両側の親戚がそれぞれどのような関係性を示しているのかについて解明することも不可欠だと評者は考える。

---

(一) Yunxiang Yan (二〇一九). The Individualization of Chinese Society (London School of Economics Monographs on Social Anthropology). Berg Publishers

(二) 黒龍江省下岬村。

(三) 楊善華(一九九四)「中国都市家庭変遷中みえる幾つかの理論問題(中国城市家庭変迁中的若干理论问题)」『社会学研究』一九九四(三)。

(四) 本書で扱う「中産階級」という概念について、著者は五五ページにこのように説明している。「中国における「階級」というのは非常に複雑な分析概念であるため…ここは階級を経済能力と学歴によって(研究対象)区別する」。